

おわりに

関西大学探検部顧問

関西大学工学部教授・工学博士 川手昭平

関西大学探検部は創部以来37年の間に、学術研究、山岳登攀、激流ボート航行、洞窟探検、海底探査などの部門で独自の専門的知識と技術を磨き、国内外多数のフィールドで探検活動を行って、その成果は高い評価を受けてきました。ときには、これらの経験と技術を活かして、急流河川や洞窟内の遭難者の救助、海中公園開設のための海底調査などの活動も行ってきました。

ここ数年来、探検部部員の関心は第二の極地と言われる砂漠、特に隣国中国のタクラマカン砂漠に向けられ、1991年7月～8月には探検部単独の遠征隊が、同砂漠北部を東に向かって流れるタリム川1680kmをカヌーで航行するという世界で初めての快挙に成功しました。ついで、同年10月には3大学合同企画の探検隊に部員2名が参加して、同砂漠南東部カラミラ河床域の踏破を達成しました。

現在世界各地で、森林伐採などの人為的要因と、未知の地球科学的要因によって広大な面積にわたる砂漠化が進行しています。この自然の猛威に対しては植樹・緑化の果敢な挑戦が試みられています。他方、砂漠の地下に眠る膨大な油田の探索・開発や、砂漠地帯の広大で強度な日照を有効に利用しようとする太陽光発電計画など、人知の応用の壮大な実験が推進されています。乾燥不毛の荒地として顧みられなかった砂漠は、今や若者の夢とロマンをかき立ててやまぬ魅惑の地となりつつあります。ましてシルクロードの中央に位置する最大の難所として、幾多の興味深い歴史を秘めたタクラマカン砂漠に情熱をかたむけるのはむべなるかなであります。

1995年は奇しくも、スウェーデンの大探検家スウェン・ヘディンがタクラマカン砂漠南西部の横断を試みて志し成らず、敗退して100年に当たります。以来今日まで、恐らく誰も徒歩踏破したことのないこの砂漠内部のルート500kmに、このたび近代的な科学的装備を完備して挑戦し、見事に成功を収めることができました。同時に専門研究者の指導の下に、砂漠化機構解明の基礎データとするための地理学的、気象学的観測や資料採集、あるいは砂漠生物学的資料採集等を行い、現在解析を進めておりましてその成果が期待されます。

また、同行中国隊員とは勿論、現地の多くのウイグル人や中国人との交流は日中友好の一助ともなったことと信じております。

科学的知識と技術の極度に発達した現代においては、探検、特に学生による探検行は、もはやかつての人跡未踏、未知危険の地への命を賭けての挑戦、発見、開拓ではありえません。一つの大きな目標を設定し、これに向かって周到な計画と万全の準備を積み、苛酷なまでのトレーニングを重ねてのち敢然と自らの限界に挑戦する、そこに得られるものは自らの人間の内的飛躍的發展でありましょう。こうした壮大な探検行のあとで必ず隊員の口について出るのは「行動中よりも準備段階の苦勞の方が大きかった。」の一言であって、この言葉こそ探検行成功の秘密があり、探検部存立の意義があると考えております。今後の探検部の発展に大いに期待を寄せているところであります。

今回の遠征には、多くの企業や個人、大学関係機関などから多大の有形無形のご援助をいただきました。特に、日中科学技術協力会議をとおして、中国科学院・新疆生物土壤砂漠研究所の強いご協力で、中国側隊員や支援隊の派遣、機材の供与、資料の採集、搬出その他の便宜が与えられ、計画成功の大きな支えとなりました。一方探検部としても、部員はもとよりOB一同が協力して推進し、総指揮としてOB1名の参加を得ることもできました。

多くの機関及び関係者の方々の絶大なるご後援、ご協力に改めて厚く御礼申し上げる次第であります。

